あゞ無情（適当）

ママキラーA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あゞ無情（適当）

【Ｎコード】
Ｎ８５９８Ｘ

【作者名】
ママキラーＡ

【あらすじ】
舞台は現代の日本。日本の国民は生きるために学校に通い会社に通い将来の為に知識を増やしたりお金を稼ぐ。
こんな日常が当たり前に続いていたころ、あることが社会的に問題になった。それは『行方不明者の続出』年に数人ぐらいなら国民もあまり関心は寄せないが、半年ほど前から行方不明者の人数は拡大に上がり半年におよそ百人になった。そのせいか人々は興味や得たいのしれない物への恐怖を持ちながら生きていくことになる。その中で『弥之結城』はその原因を知るものの数少ない一人であり結城

はこの原因を解決するべき日々働いている……というのは嘘で、言うほどがんばって無いんで（・∀・）自分にはこれ以上のシリアスは書けんｗｗ恐らく更新はとても遅く、気分によって内容が濃くなったり薄くなったりしますｗ駄文＆ａｍｐ；幼稚な内容ですが超暇なときとかに見てくれたら嬉しいかも（〃▽〃）（笑）

プロローグ

―とある部屋の一室―

『…続いてのニュースです。去年行方不明となった『小林市　健斗』さんがいなくなり一年が経ちました。

ちょうど小林市さんで行方不明者が１００人を越えましたが、この数字について後藤さんどう思います？』

『…これは少し異常な人数だと行ってもいいでしょう。

…確かこの人数は今年に入ってからの行方不明者ですよね？』

『はい。そうです。しかも今日は6月１５日

およそ半年で１００人行方不明になりました』

『このままだと一年で軽く２００人はいくかも知れませんね

何か事件に巻き込まれているのか、外国から拐われたのかはわかりませんが皆さんも出来る限り二人以上で外出することを心かけて下さい

行方不明者は幼児から高齢者までいるので『自分は大丈夫だろう』というようなことは思わないように…』

『そろそろ番組の終了時間が近づいて来ました。

ここで改めて行方不明になっている小林市さんについての情報を紹介したいと思います

小林市さんは年齢３６歳、身長はおよそ１７４?、体重６８キロの中肉中背の男性です。小林市さんの情報を知っている方は当番組のＨＰ、または〇〇〇ー▲▲▲ー××××までどう…』

ブツンと突然テレビの画面が真っ暗になる

「無駄なのに…
見つかるはずもないし見つけられる筈も無い」

コトン

と青年はテレビのリモコンをテーブルの上に置く

「はあ～、
こののんびりできる時間は最高だよな～」

そう言いながら自分が寝転んでいるベットで大きく伸びをした
ベットの周りには誰もが持っているであろう大人気連載中のマンガやゲーム機、クローゼット、タンスなど生活感溢れるものが沢山あった。

「結城～、洗濯物出しなさ～い」

「へーい」

結城と呼ばれた青年は身の回りにある洗濯物をかき集めると両手で洗濯物を抱え込み、指で部屋のドアを開けると足下に注意しながら階段を下っていった

「母さん、コレ」

結城はその両手で抱えた洗濯物を一気に洗濯機に入れる

「あんたね…
もう高校二年なんだから少しは将来に向けて「わかりました！」…
はぁ」

結城は母親の言葉を遮りそれだけ言うと再び自分の部屋に戻っていった

「さて…
今日は昼からあいつとカラオケか」

結城はベットに腰をかけながら机の上にある時計を見る
そしてその横に置いてあったリストバンドを必然的に見てしまった

そのリストバンドは全体が緑色の一見普通のリストバンドであった

「あれからだいぶ時間が経ったな…」

結城はが過去を思い出していると突然リストバンドが緑色から黄緑色に変わった

「まさか…！！
また、出てき…いや、黄緑色ということは生まれたてか死にかけのクズやろ」

結城は急いでタンスからジャージを取りだしジャージに着替えリストバンドを手首につけクローゼットの奥に隠してあった木刀を持つ

「さて…
『鬼狩り』と行きますか」

数秒後、結城がつけているリストバンドが光ったかと思うと結城の姿は部屋から消えていた

恐らく一話だろう

ピピピピピピピピ

午前六時半

携帯のアラームが鳴った

「んぁ…、朝か…」

低血圧なのか結城は朝には弱いようだ。手探りで携帯を探し手に取るとアラームを解除する

「はぁ……」

結城は寝ぼけながらベットから立ち上がると前日の夜に用意しておいた学生服一式に手を伸ばす

結城が通っている学校は特に指定の制服が無いため一般によくあるカッターと黒いズボンだ。

「しんどー…」

制服に着替え終わると朝御飯を食べる為に学校の教材を入れてあるカバンを持ちリビングに降りようとしたとき机の上に置いてある緑色のリストバンドに目が止まる

「一応いれとくか…」

緑色のリストバンドを手につけるのでは無くカバンの中に入れると
そのまま部屋を出てリビングに向かった

「パンでいい？」

「…ん」

リビングには結城の母親、『智里』がすでにいた。
智里はオーブントースターにパンを入れて焼き始める

「結城～
朝刊取ってきて」

「…だる」

結城は小さく文句を言い朝刊を取りに行った

結城はポストに入っている朝刊を取ると母親に渡す前に一番大きな
ニュースだけを見る

『１０１人目の行方不明者兵庫ででる！！』

新聞には大きくそう書いてあった

「ふーん、兵庫ねぇ…
誰が死んだのかは知らんけど恨むなら兵庫のやつらを恨みな
俺の手は兵庫まで届かん」

新聞は行方不明としかかかれていないが結城はすでにその行方不明

者が死んでいるということがわかっていた

「ほれっ、朝刊」

結城は家に帰ると智里に朝刊を投げ渡す

「ありがとう。パン焼けたわよ」

結城は智里からパンを貰いテーブルに座るとパンを食べ始める

「また、行方不明者だって…怖いわね」

新聞を読んでいるの母親から声がかかる

「俺もさっき見たけどそれ兵庫だろ？
俺らが住んでる滋賀県は田舎やし大丈夫やだって」

「そりゃ…私達が住んでる場所は兵庫に比べると田舎かも知れないけど、安心は出来ないわ…
ここらの地域では行方不明者はまだ出てないけど端の方だと一人出てるじゃない…」

智里の言うとおり滋賀県は他の県と比べて半年前から出始めた行方不明者の数は極端に少なく未だに一人しか出ていなかった

「あんたも気を付けなさいよ」

「いやいや、俺も確かに気をつけなあかんけど一番気をつける必要があるのは親父だろ…
仮にその行方不明者が人為的な物であったとして」

弥之家の大黒柱の『弥之　大寺』は結城と会う日があまりない。大寺は別に海外出張などに行っている訳では無いが働いている場所が２４時間稼働している工場の為三交代勤務であり帰って来る時間は早朝だったり昼間だったり真夜中である為誰かに拐われてもわからない

ということだ

智里も結城の言うことに納得しているのか少し虚空を見ながら考え事をしている

「…そうね
お父さんは特別何か対策してもらわないといけないかもね」

「防犯ブザーを数十個持たしたら大丈夫じゃね？」

「その案いいかも知れない…」

「ふざけて言ったつもりなんだけどな…」

すでに智里の耳には結城の言葉が届いてはいなかった。

「ごちそうさん」

結城はパンを食べ終わると食器を台所に置き、そのまま洗面所に移動する

「（兵庫のやつらは雑魚なのか？それとも、あの時のような異常な鬼が出てきたのか？）
まぁ、どっちにしても俺には関係無いか引退した身だし…
俺に出来るのは残党狩りぐらいっと」

結城は顔を洗い歯を磨きくと髪の毛をセットし始める

「いつも思うけど俺どんだけ寝癖ヤバイんだよ…」

寝癖によって跳ねた髪の毛を正常な位置に戻す

結城の髪の毛はショートでそこまで寝癖がつくはずの無いのだがなぜかあちらこちら跳ねていた。

「そろそろ時間かな？」

洗面所で一式することが終わるとリビングに戻る。リビングではまだ「…警棒も捨てがたい」とかわけわからんことを言っている母親がいたがそれを無視しカバンを持つと結城は家を出て自分が通っている芦田高校へと向かった

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

芦田高校は結城の家から自転車でおよそ２０分先にある学力が中レベルの学校だ。特に何か凄いという学校では無く近所の人達に芦田高校に通ってますと言うと『芦田高校？あぁ…、そう。で、それがどうしたん？』と言われるぐらいの普通な学校であった

そんな芦田高校に通う為結城は朝から自転車を飛ばしている。ちなみに今まで一年とちょっと芦田高校に自転車で通っているが曲がり角からパンを加えた美少女とぶつかり『いたぁ～い』『す、すみません大丈夫でしたか』からの恋は一度もない。変わりといってはなんだがあるのは自転車のベルを鳴らしたとき歩行者の『チッ！』という舌打ちなら数えきれないほどある

「今日は舌打ちは無し…と。」

芦田高校に着くと駐輪場に自転車を止め教室に向かう。教室では数人の生徒がすでに来て談笑していた

結城は無言で教室のドアを開けると中からいっせいに注目される。別に結城が珍しい訳では無い。ただ誰が来たのかと言うことを皆は知りたいわけであり来た人物が結城だとわかるとまた先程のように喋り始める

結城は自分の席まで移動するとカバンを下ろしイスに座り携帯をいじり始める。結城も会話に参加すればいいのでは？と端からみたら思うかもしれないがいかんせん結城とその生徒達はそこまで仲がいいわけでは無くぞくにいう『知り合い以上、友達未満』というやつだ。だから結城は携帯を弄り友達が来るのを待つ。結城が来てから数分経過して時間は０８時００分となった
０８時３０分からＨＲが始まるのためちらほらと生徒達が教室に入ってくる
その入って来た生徒の中の一人はカバンを席に置くと結城のもとへ向かってきた

「お前今朝のニュースみた？今度の行方不明者は兵庫だって…怖いな…」

「俺はお前の顔が怖いよ」

「黙れ、死ね」

「遠慮させてもらう」

軽いジョークが二人の間で交わされる。

結城に喋りかけてきた相手『斎藤　務』は中学からの知り合い一緒に芦田高校に来た友達の一人だ。他にも一緒に来た友達はいるのだが結城にとっては務が一番一緒にいる時間が長く親友とも言える存在だと思っている。

務は強面で、野球部でもあり髪型は坊主でがたいもよくその怖い顔が強調され他人はまず務には用が無い限り話かけない。だがそんな顔とは裏腹に気さくで優しく見た目ほど怖くない（怒る時はちゃんと怒る）ためクラスの人達は躊躇いもなく務に話しかけている。

ちなみに結城の顔はどこかムスッとしているようにも見えるし考え事をしているようにも見えるが怒ってるようには見えないという顔だ。特徴は無くしいていうなら髪がショートなので顔全体が見えるということぐらいである。体はムキムキでは無いが歳と体つきに比べたらガッチリしているほうである。結城は部活には所属してはいないが、もし所属していたとして顔と体で判断するのであれば水泳部と言われてもおかしくは無い

「でさー、今度の休みに映画見に行かねぇ？」

「映画かぁ…、今何かおもろいのあんの？」

「『インセクト』ってやつ。あらすじは突如昆虫化した人間が普通の人間と暮らす為に努力するっていう泣ける映画」

「それ、おもんないやろ…」

「いや、絶対面白いって！！予告編見たけど涙出そうやったし」

「わかった！わかったからその顔で近づくな！他人が見たら絡まれてるようにしか見えんから！」

「じゃあ、いつにする？俺の予定は今週の土曜は練習試合だけど日曜はフリーなんだわ」

「日曜でええよ。俺も７０％の確率でいけるわ」

「中途半端やな…、何その７０％？」

「美少女の幼なじみからデートの誘いが来るかも「黙れ、幼なじみなんておらんやろ。ってか鏡見てこい」…急な予定が入るかもしれんから」

「そうか。じゃあほぼ行けるってことやな？」

「まぁ、ほぼ行けるわ」

「わかった」

キーンコーン
カーンコーン

結城と務が話終わるとほぼ同時にチャイムが鳴った。周りを見てみるとほとんどの生徒が席についている。先生に怒られまいと急いで自分の席に戻る務を見て結城は少し楽しんでいた

ガララララ

と教室のドアが開いたとかと思うともうすぐ定年間近の担任が入ってきた

「今日は皆にとても嬉しい知らせがあります」

『まさか…』

『この展開、この空気これは恐らく…』

『絶対美少女だ。美少女に決まっている』

とクラスのノリのいい人達は転校生と信じきってテンションが上がっている

「中間テストの教科が一つ減りました」

先生の一言に先程テンションが上がっていたやつらは

『お、おぉ…、そっちか』

『ま、まぁ、悪くは無いけど』

『確かに悪い知らせでは無いけど』

『『『なんだかなぁ…』』』

「君たち転校生がいなくても美少女にははクラスにいるでしょう」

『違う…
違うんだよ先生…
そういうことじゃ無いんだよ』

『わからないのかなぁ～
先生には転校生という魅力を…』

別に芦田高校は男子校と言うわけではなく女子もちゃんといる。その比率は結城がいるクラスで男女＝６：４。たまに７：３というぐらいだ

「先生には君たちの言ってることがよくわかりません。
時間も無いのでＨＲを始めます…」

こうして今日もいつもと同じ授業が始まった

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

「ただいま」

いつものように授業を受け友人とたわいもない話をしたあと結城は自宅に戻っていた。自宅に帰り部屋に戻ろうとした時、

「結城！！これ見てちょうだい」

母親に呼び止められ母親のもとへ近寄る。

「なに？」

「今やってるニュース…」

「ん？」

母親が凝視しているニュースに結城も目を向けた。

『三重県の四日市市に住む男性『栗山　真』さん４３歳が行方不明になりました

『栗山　真』さんの妻『吉江』さんによると真さんは昨日の朝いつも通りに会社に出社し、定時になりいつものように真さんから『今から帰宅する』というメールを受け取った吉江さんは夕食の支度をしていたところいつまでたっても帰ってこない真さんを心配し連絡をするが、真さんの携帯には電源が入ってなく何か事件に巻き込まれたのではと心配した吉江さんが警察に頼み、昨夜から警察による調査が続いていましたが先程、警察は真さんの失踪を行方不明といたし捜査を打ち切りしました。これにたいし妻は…』

「三重県か…
近いな」

「最近行方不明者の数が増えてきたと思っていたらとうとう一日に一人ペースになってきたわね
結城、あんた本当に大丈夫？」

「俺は大丈夫だよ」

「その自信はどこから沸いてくるのかしら…」

「勿論俺自身から」

「そう…
まぁ、いいわ
話は変わるけど母さん今日は友達と飲み会なの。晩御飯は作ってあるから勝手に食べといてくれる？」

「了解。気をつけていってらっしゃい」

「ありがとう。でも心配しなくていいわ、友達が家まで送り迎えしてくれるから」

智里はそう言うと飲み会に向けて準備をするといって一階にある自分の部屋へ向かっていった

結城も自分の部屋に向かう。部屋に入りカバンを置きベットに寝転

がる

「（おかしい…
こんなにも立て続けに出るなんて…、やはり何か異常がおきているのか…

…考えるだけ無駄やな
滋賀の俺には関係無―…）」

結城はあれこれ考え事をしているうちに今日の疲れが出たのか制服のまま寝てしまった

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

「あれっ…いつの間に」

日が落ち窓から入ってくる光は隣の家の部屋の明かりくらいであり辺りは真っ暗になっていた。結城は時間を見るため机に置いてある時計を部屋の電気をつけて見る

「２０時０６分…か
母さんはもう飲み会に行ったやろうな」

そろそろ自分も晩飯を食べようと思ったとき、先程時計を見て何か忘れていることに気づく

「何か足りんよう…
あ、リストバンドか」

いつも時計の横に飾ってある緑色のリストバンドを思いだす。

「今日は帰ってすぐ寝たかんなー」

カバンの中にしまってあるリストバンドを見つけると時計の横に飾った

「よし！飯食いにい…！！」

結城は夕食を食べるため部屋からでようとしたとき、視界にまた緑色のリストバンドが黄緑になっているのが目に入った

「嘘だろ…
二日連続とか…」

結城は昨日とは違うジャージを取りだし制服から着替えるとクローゼットの奥にある木刀を持ちリストバンドを手につける

「腹減ったのに…
はぁ〜『鬼狩り』行きますか…」

リストバンドを着けた数秒後部屋から結城の姿は無くなっていた

恐らく二話だろう（前書き）

説明回

主に台本書きです＾＿＾

できるかぎりわかるようにかいたつもりですが、ワケわからない設定や矛盾している、おかしいと思うところがあるなら言ってください（・∀・）

恐らく二話だろう

最初からいたように結城はとあるジャングルの中に立っていた

「はぁ～、
昨日といい今日といい俺に休息は無いのか……」

結城は木刀で草木を分けながらそこに目的があるのか前へ前へ進んでいく。

「どこだよ……
手間がかかる……」

前へ前へ進んでいると突然結城の足が止まった。

そして次の瞬間、結城の背後の木の影から

「ウグルォォアォォオ！！！」

と、訳のわからない叫び声をあげながら結城に向かって突進してくる生物がいた。

「探す手間が省けたよ」

結城はあまりにも嬉しいのか笑みを浮かべながら後ろを振り向く
結城の目の前にはおよそ二メートルほどの大きさで砂が固まって出来たような蟻の体をし、顔は蜘蛛のようでその体には三本足の足が

つき器用に三本の足でバランスを取りながら走ってくる謎の生物がいた

その蜘蛛のような顔をした生物は大きく口を開け結城を飲み込もうとする

「子供は親に狩りを頼みな」

結城が木刀を縦に振ると蜘蛛の口が四つに裂け結城の一歩手前で蜘蛛が倒れる

「ギョオバェオァィェア！！！」

痛いのか怒っているのかはわからないが大きく叫び声をあげ、その蜘蛛は立ち上がると再び結城に向かって大きく口を開け飲み込もうとする

「俺はお前と同じでさっさと飯食いたいんだよ」

結城は木刀を蜘蛛の口の奥に差し込むと、一気に蜘蛛の頭に向かって引き上げた

「う、ウェォお……」

蜘蛛のような生物の顔は口から頭に向けて真っ二つに割れている。その生物はその場に倒れ込みジタバタと足を動かすが数分すると動かなくなりその砂の体は徐々に崩れていった

「超低級鬼の子供だな
突進と口を開けることしか出来んとは……
さて、今日は終わりだな」
結城は伸びをしそのついでに手首についてあるリストバンドを見る。
「……まだ黄緑だと？」
リストバンドの色はいつものような緑色では無く黄緑色のままであった
「鬼がまだいるのか……
俺の時間が無くなる……」
結城は再び鬼を捜し歩こうとしたとき
「お、おい！お前自衛隊か？助けに来てくれたのか？」
ジャングルの奥から一人の中年男性が出てきた。
「はっ？あんた誰ですか？」
「私を探しに来てくれたんじゃないのか！？」
「いや、別に……
ってかあんたどこかで見たような……」

結城はその中年男性の顔をじっくりと見る。中年男性はじっくり見られて気持ち悪いと内心思ったが、自分を助けてくれるかもしれないという期待をよせていたため機嫌を損ねないよう何も言わなかった

「あぁ！！思い出した！
さっきニュースでやってた
確か……『栗山　真』さんでしたっけ？」

「おぉ、そうだ！
私は栗山　真だ！
いったいここは何なんだ？昨日会社から帰宅途中気がついたらここにいたんだが……
周りは草木に覆われてるわ。変な生物に食われそうになるわ
訳がわからん！！
お前何か知ってるんだろ？説明してくれ！！」

「わかった。わかったから声の大きさを控えて下さい。俺一人ならいいが貴方もさっきみたいな生物に襲われてしまいますよ？」

栗山は今までの不安がつのり精神が不安定になっていたがまともな考えが出来ていたため結城の言ってることを理解し『そ、そうだな』と言うと口を閉ざした

「とりあえず、どこか落ち着けるような場所を探すとするか」

「……それならいいところがある。私が今まで隠れていたところだ。ここから数分もしないところにある」

「よし。じゃあそこでゆっくり話すか」

「こっちだ」

栗山の後ろに結城はピッタリつきながら歩いていった

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★

「ここだ」

栗山の案内に従い結城がついていった場所は草木が上手いこと覆われかまくらみたいになっている場所であった

結城と栗山はその場所に入ると地面に腰かける

「先に行っておくが質問は一つずつ聞いて下さい。

俺は聖徳太子じゃないんで一気に質問は覚えられない」

「あ、あぁ……

わかった」

「じゃあ質問をどうぞ」

「まずここがどこだか知りたい」

栗山は一番気になっていたのかその質問をすぐに言った

「ここはね栗山さん

日本ですよ」

「日本？大人をバカにしているのか！？

こんなところが日本のわけ無いだろう！」
栗山は結城の言ったことがあまりにも信じられなかったのか否定をするように大きく声をあげる
「声を小さくして下さい」
「す、すまん
だが日本では無いだろう？」
「先程は大まかに言い過ぎました。正確に言うとここは『人類が誕生する前の日本』です」
「は？何を言ってるんだ？それなら私たちはタイムスリップしたということか？馬鹿馬鹿しい……」
「なら栗山さんはここをどう思います？
映画舞台？それとも近所の裏山？ＣＧ？
わかっている筈だ。ここがそんなものでは無いということが。
貴方も見たでしょ？さっきみたいな生物を」

「だ、だが、しかし……」
「証拠を提示しろと言われると俺も困りますが……
俺も最初はここが日本なのか？と疑った身なので栗山さんの気持ちがわかります。
……でも信じて下さい
ここは日本、、俺もそう教わりました」

「君も教わった？誰にだ？」

「ここでの生きる術を教えてくれた俺の先生です」

「その先生はどこにいるんだ？」

「……先生はもうこの世にはいません
さっきみたいな生物の仲間にやられました」

「……そうか。悪いことを聞いたな
すまない」

「別にいいんで……
他に聞きたいことは？」

「仮にここを日本だとしてさっきみたいな生物はなんだ？
あんなの化石でも見たことが無いぞ」

「先生は『鬼』と呼んでいました」

「『鬼』？
あの角がはえてる鬼か？」

「はい。先生が言うには別に呼び方なんてどうでもよかったらしく
一番始めに出会った生物が鬼ぽかったので鬼と言うんだと言ってました」

「な、なるほど……
大まかには事情を理解した

それで……
私たちはなんでここにいるんだ？」
「簡単に言うと鬼を殺す為です」
「なぜ殺す必要がある？ほっといても恐竜やら氷河期やら猿人が殺してくれるだろう？」

「……そんなものじゃ死なないと思います
『鬼』がそんなものに殺られているなら俺達はここに来る必要が無い
そしてこの『鬼』がこのまま存在していれば戦う術を持たない人類はすぐに死んでしまい俺達は産まれてこなくなる
だから俺達は『鬼』を殺さなければならないと先生は言っていました」

「そう言われると辻褄が合うかも知れないが…
ところでなぜ私がここに呼ばれたのだ？
こんなことを言っては悪いかもしれないが他の人でもよかったんじゃないか？
私にする必要性はあったのか？」

「あぁ、それは恐らく偶然でしょう
今までいなくなった人達に共通点は無いですし、
人手が足りなくなった……
だから呼ばれてきたんでしょうね」
「ちょっと待て！『今までいなくなった』？

ということは今までの行方不明者は全てここに来ているのか！？」
「はい。本当にただの行方不明者もいるとおもいますが、９５％はこちらに来てるでしょうね」
「なら、探しに行こう！もしかしたら生存者がいるかも「いないです」探しもしないでなぜ言い切れる！？」

「栗山さん
よく聞いて下さいここのシステムは簡単に言いますと
『現代からここに呼ばれる』
←
『鬼狩る』
←
『現代に戻る』
←
『現代から―…』
と言う感じです。俺達は鬼を狩ったら現代に戻れる
この意味わかります？」

「鬼を狩れないなら現代には戻れない……」

「そう。行方不明者が増えているということは現代に帰ってきていない。
すわなち『死』です」

「いや、待て！もしかしたら私みたいにどこかに隠れて暮らしているかもしれない」

「……栗山さん、自分の腕を見てください」

「腕？」

結城に言われた通り栗山は自分の腕を見た
腕には結城と同じ黄緑色のリストバンドがついている

「これがある限り鬼からは逃げられない。このリストバンドは電波を発して鬼を呼んでいるのか鬼の好きな匂いなのか…なにかはわかりませんけどとにかくこれは鬼を引き寄せます
一時は逃げられても数ヶ月も逃げられる確率は０％だ」

それを聞くと栗山は手についてあるリストバンドをはずそうとする

「現代ではとれますがこの場所ではとれませんよ、これは。俺達プロがどんだけやってもとれなかったですし
どうしても取りたいのなら死ねばいいです
自然と無くなりますから。
あぁ、腕を切っても無駄ですよ。瞬きする間に片方の腕に移動して

ましたから
これは試した人の話です」
「そ、そんなことするか！」
栗山はリストバンドから手を離す
「でもこれは結構便利な物ですよ？」
「どこが便利だ！不幸の源じゃないか！」
「……まぁ、説明するんで聞いて下さい。
このリストバンドは現代にある時は緑色なんですよ」
「緑色？じゃあなぜ今は黄緑なんだ？」
「この黄緑はね鬼の強さを表すんです」
「つ、強さだと？先程より強くて大きいのが何匹もいるのか！？」
「大きくは無いんですけど強いのはうじゃうじゃいます。ちなみに先程の蜘蛛の顔をした鬼は超低級の赤子レベルですね」
「あ、赤子？」
「そう鬼の強さを表す色はこうなってます
緑＝自然な状態。ただのリストバンド
黄緑＝赤子レベルで知能も低い

黄色＝突進や噛みつく以外の攻撃もしてくるようになる

青＝狩りにも慣れ敵の弱点や強さなどが理解出来る

紫＝黄緑、黄緑、青をまとめあげ集団で狩りに出かけるリーダーのような存在であり知能も高くひとがたであり、飛び道具などを使ってくる

橙＝戦闘能力は黄色並みの鬼の強さだが知能が高く罠や小細工、ズル賢さがある

赤＝戦闘の熟練者が数人がかりでかかって軽傷以上のケガをしてやっと勝てるレベル。人形で知能も高くこちらの言語も理解でき話せる

黒＝出会ったら９９％死ぬ

白＝死

ということです。俺達はこの色で鬼の強さを区別し狩りにいきます。鬼を倒すことでリストバンドの色が緑色になると現代に帰れます」

「様々な鬼がいるんだな…

ん？よく考えて見るとおかしいじゃないか。お前のいった通りだとその白レベルの鬼がいることをなぜ知っている？その鬼＝死、なんだろう？」

「……それは本当です。その白レベルの鬼にあったら死にます
それなのになぜ俺が知っているか？それは一度白レベルの鬼に会ったからですよ」

「お前が言っていることは矛盾しているぞ
お前の言ってる通りならお前は死んでいなくてはならない」

「……俺が生きている理由それは奇跡です」

「奇跡？」

「ここから少し詳しい説明になりますが、ちゃんと聞いて理解して下さい

俺もまだ詳しいことは理解してませんがとりあえず先生が言っていたことを言います
俺達は鬼を狩るためにここに来ていますが、実は俺達は鬼が出たからといっても必ずこの場所に来なくてもいいんです
俺達狩る側は自分の領地、すなわち自分がすんでいる（滞在している）地域もしくは県に遠い未来になるであろう場所に鬼が出たときだけ俺達はそれぞれこの過去の日本に来させられてると先生は言っていました」

「……すまないが私の頭じゃ、よくわからん」

「簡単に言いますと、三重県なら、

三重県になるであろう場所に鬼が出たら三重県に住んでいる（滞在している）『狩る者』達が過去に行き、鬼を狩り現代に戻ってくるその時、三重県以外にいる人達は三重県に住んでいる人達と一緒に過去に呼ばれることは無く、あくまで三重県に出た鬼は三重県の人達だけが過去に行きその鬼を狩らなければならない
と先生は言ってました
俺も実際試したことがあるのでこれは絶対のはずなんです」

「……はず？」
・・
「そうはずです
この法則が一度だけ破られました
そしてそのおかげで俺は生きているんです」

「……詳しく聞こう」

「一年前…、
白レベルの鬼が出てきました
その当時は先生も生きていて、鬼を狩る人達も沢山いました
あぁ、沢山と言っても滋賀県だけの人数ですよ。

そのときはいつものように狩りをして現代に帰ろうとしていたんですが、鬼の強さを確認するためリストバンドを見ると白に染まっていました
俺達は何もわからずはじめての色の鬼が出てきたことに少し驚きましたが当時俺達は黒レベルの鬼も倒したことがあり白なんか目じゃないと思いいつものように狩りにいきました。辺りをくまなく探した結果見つけたんですその白レベルの鬼を…」

「……それで？」

「俺達はその白レベルを見たとき頭で考えて行動するより先に自然と体が動いていました
俺達はいっせいに逃げたんですよ『こいつには勝てない。いやこいつには勝負などない。あるのは死だけだ』と感じたんでしょうね。
俺達は必死に逃げた
結果その鬼からは逃げられました……というよりその鬼は俺達を追ってきませんでした
俺達は逃げて逃げて逃げて逃げぬいた時とある巨大な洞窟についたんです
リストバンドの力が働いたんでしょうね…
洞窟の中には何百人もの人達がいました…

自分達がみた鬼の情報をかねながら色んな情報交換をするために話しかけてみたところその人達は鬼狩りのプロであり全員黒レベルの鬼は倒したことのある人達だったんですがその人達も俺達と同じで白レベルの鬼を見て洞窟に逃げてきたんです」

「……私には想像がつかない」

「でしょうね。
想像出来ているなら栗山さんは仏以上の精神力を持ってるでしょうね

まぁ、話を続けます。
そして俺達はこれからどうするか先生を中心に話し合いました
話あった結果皆の意見は同じで『現代に戻りたい』でした

皆の心が一つになり始め現代に帰るため白レベルの鬼を倒すための作戦を練っているとその人達の中の一人がふいに言ったんです『この戦いは全員が生きて帰れるかわからない。だからもしものことがあった人達の家族などの面倒を見るために皆の住んでいる場所を言い合わないか？』と
皆はいろいろもめましたが最終的には全員賛成すると皆自分の住んでいる場所を言い始めました
その時に気づいたんです皆住んでいる場所がばらばらだということに……
数えた結果、全都道府県から最低でも5人以上はいました

全員今までそんなことは無かったのでなぜ別々の県から来ているのか白レベルの鬼が何か関係あるのか？
全員がこのことについて考えてると先生が急に言ったんです
『全員で力を合わせろ。一人二人じゃ勝てないが全員でかかれば必ず勝てる
と言う意味だろ！』
まぁ、ただ生きる希望を、勝つ希望を先生は持たせたかったんでしょうね。ほんとのところは今でもわかりませんよ。
俺ですか？俺は先生の言ったこととほぼ同じです

まぁ、そして皆は先生の言葉に納得し『勝てない』と言う気持ちを捨て、皆が覚悟を決めた一時間後、数百人の人数で白レベルの鬼に挑みました」

「そ、それでどうなったのだ？」

「……闘いは三日間寝ずに続きました

その結果俺達は白レベルの鬼を殺しましたよ
数百人の犠牲を払って…」

「……そのときにお前の先生も死んだんだな」

「そうです。先生は立派でした
俺達何百人もいるなかで先生は一番強く皆を守りながら闘い、最後は鬼の渾身の一撃が皆に当たらないようにと自分の体を犠牲にして皆を守り死にました」

「立派な人なんだな
その先生は。」

「ええ。最高の人でした
……でも先生を知っている人物はもう数十人しかいませんけどね
だから生き残っているのは奇跡なんですよ」

「そういうことか……」

「少し俺からも質問いいですか？」

「ん？なんだ？」

「ニュースで見たところ
栗山さんは帰宅する間に行方不明になったと言っていましたが本当ですか？
どこか寄りませんでしたか？

例えば電車に乗って
・・
滋賀のお店に行ったりとか…」

「滋賀なんかに行ってない！いつものように俺は自宅に真っ直ぐ帰るところだった！！」

「絶　対　で　す　か　？」

栗山は自信を持ち胸をはって言うが結城のただならぬ空気を感じとったのか

「あぁ…、
絶対だと……思う」

先程より小さな声で不安げに言った

「……そうですか
わかりました」

「最後に一つ聞いてもいいか？」

「何です？」

「ここでの生きる術を教えてくれないのか？」

「……うーん、俺はちょっと無理ですかね」

「何故なんだ！？私にも家族はいるんだ！！
頼む！！」
栗山はその場から立ち上がると結城に向かって頭を下げた
「顔を上げてくださいよ！
どんなことされても無理な物は無理です！」
「なぜ無理なんだ…
その理由を教えてくれないか？」

「栗山さんにも生活があるように俺にも生活があります。お互いの時間もそんなにとれないでしょうし俺が教えるにも限界があります生きる術を学ぶには実践が一番重要になってくるんですが、先程も言った通り鬼が出る場所によって過去に行く人達もそれぞれです。もし実践で教えるとすれば俺はずっと栗山さんが住んでる三重県にいなくちゃならない。そんなの無理だ。逆に栗山さんがずっと滋賀県にいるのにも限界がある。それに同じ県にいたからといって過去にいく人が全員一ヶ所に集まるということも無い
今日のは恐らく偶然であってそう何回もこの偶然が続くとは限らない」
「それなら…
私に死ねというのか？」
「…だから言ってるでしょう。
・・・

俺には無理だと
教えてもらうのは同じ県に住んでいる人達に頼んで下さい
リストバンドの力で巡り会えると思います。皆も同じ境遇なのできっと栗山さんの力になってくれると思いますよ」

「そ、そうか…
そうかそうか
何から何まですすまないな…
本当にありがとう！」

「いえ、感謝されるほどのことでは無いので…

あれっ？」

結城の視界に栗山のブレスレットの色が目に入った

「栗山さんブレスレットを見てください」

「ん？どうかしたのか？」

そう言うと栗山は自分のてについているブレスレットを見た

「さっきまでは黄緑だったのに今は緑色になっている…

ということは！？」

「俺達が話している間に誰か別の人が鬼を狩ってくれたんでしょう

とりあえず現代に戻れますよ」

「では、妻に会えるのか！」

「会えますけど…
今帰っても大変でしょうね…
栗山さん行方不明になってるので」

「確か始めにそう言ってたな…
何てマスコミと妻に言おうか……」

「それは適当に嘘言うしか無いでしょうね…
ほんとのことを言ったら病院に連れていかれるでしょうし」

「そうだな……」

「そろそろ現代に戻ると思います。
またどこかで会いましょう」

「あぁ、そうだな」

「次、会うときは
・・・・・・・・・・・・
ある程度使えるようになっていて下さいね」

「はっ…？なん―…」

栗山が結城の言葉が引っ掛かり尋ねようとしたところ結城が目の前から消えそして自分の視界も暗くなった

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

「あー疲れた」

部屋に突如結城の姿が表れる。結城は持っていた木刀をクローゼットの奥にしまうと手についてあるリストバンドを外し時計の横に置く。

その時ついでに時間を見たところ、２２時４８分と時計には表示されていた

「俺の時間が…」

結城は肩を下ろしとぼとぼとリビングに降り夕食を食べるとすぐに部屋に戻り寝てしまった。

ピピピピピピピピ

いつもの時間にアラーム機能がついた携帯が鳴る

結城は手探りで携帯を探しアラームを切ると制服に着替えリビングに降りていった

「…おはよ」

「あぁ、結城おはよう！

ビッグニュースよ！」

「…何が？」

「昨日行方不明となった『栗山　真』さんが昨日の夜中にひょっこり姿を表したそうよ！！
行方不明になって帰って来たなんてはじめてじゃない！」

「…あぁ、そう」

「『栗山　真』の証言によると帰宅途中何者かに背後から襲われ監禁されていた時にとある青年が助けにきてくれて監禁場所から逃げ出し自宅に帰れたらしいわよ！！

とても勇気のある青年だわ～
結城もこの青年の勇気を見習いなさいよ」

「…おもんないわ（俺自身から勇気を学べばいいんだな）」

「ギャグ違う！」

「あーそう。それより朝飯くれ」

「パンでいいかしら？」

「うん…（切り替え早っ！）」

この後結城は朝食を食べるといつものように学校に通うのであった

恐らく三話だろう

芦田高校
―昼休み―

「ねぇ結城。今日一緒に遊ばない」

結城のもとに昨日朝に会った生徒とは違う別の生徒がやって来た

「務の次はお前か！」

「務がどうしたの？」

「いや
何でもない…
で、何して遊ぶつもり？」

「最近新しい格闘ゲームを買ったんだ。僕の家でやらない？」

「海（かい）の家か…」

結城と話している青年『雲英（きら）　海（かい）』は結城と同じ中学で中学二年で二人は同じクラスになり席が近かったためお互いにはなしを始めたのがきっかけでそこからいつの間にか友達と呼べる存在になり遊ぶことが多くなった。
結城にとって海も務と同じぐらい話す友達の一人だ

海の体格はいいようにに言えばスラッとしている。悪くいえば肉が無い。背丈もあまり高いわけでは無く男だが顔立ちは中性的な顔に

近く髪がストレートで長く首近くまであるため服装しだいでは女性に間違えられることも多少ある。そのせいで男子には可愛がられるのだが本人はそれがいやで一度髪をばっさり切りショートヘアーにしたのだが今度はボーイッシュな女の子と間違えられて女子達に違う意味で可愛がられてしまい最終的には女子に可愛がられるぐらいなら男子に可愛がられるぐらいがマシということで髪を伸ばすことにしたらしい。

結城は特に予定も無く暇であったため

「予定が無いから行くわ」

と言っておく

「結城はいつも予定無いでしょ」

「そんな可愛らしい顔じゃなかったら殴ってるのに…なんで男なんだよ！」

「男だからだよ！」

「ちっ、まぁ…いいわ
俺にやられないようにせいぜい腕を磨くんだな」

「どこのライバル！？
っていうか結城が勝てるはずないでしょ！買ったばっかのやつなんだから…」

「俺には手には神が宿っている。負けるはずが無い！！」

「はいはい」

「……まぁ、冗談は置いといて今日は行きますよ」

「うん。」

「『雫ちゃん』が帰ってくるまでに帰らせていただく」

「…結城って本当に僕の妹嫌いなんだね」

「いや、嫌いじゃなくて苦手…」

海には妹がいる。海の妹、雫は海と血の繋がった兄弟であり海の一つ下、勿論兄弟の境を越えるようなことをしているわけでもなく極度のブラコンという属性が入っているわけでも無い。雫は頭は普通でスポーツは万能。空手部に所属していて海の強化版だ。少し性格に問題がある以外特に変わったことも無い

結城もそこまで苦手な部類に入る人物では無かったのだが、ただ結城はつい最近にある出来事があってそれ以来結城は雫を避けている

「まさか！フラれたとか！？」

「コクることも、コクられることもねぇよ

兄のお前が雫ちゃんの性格一番わかってるだろうに」

「あぁ～、確かに。雫は」

海はチラッと結城を見る

「？？」

見られて結城は少しキョトンとした

「コレには無いだろうね…」

「自分で言っといてアレだがめっちゃ腹立つ
顔から下無くなれ」

「ホラーだね～」

「『ホラーだね～』
じゃねぇよ！！
あーもうとっとと席に帰れ！
休み時間終わる」

「そうだね～」

海はそう言うと自分の席に戻っていった

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

―放課後―

「じゃ、行こっか」

海は結城の席まで来て荷物を持って立っていた

「そこは幼馴染みのポジションだ」

「??」

「…行くか」

海の家は学校からそれほど遠くは無い。歩いて１０分ほどなので結城の自転車を使って二人乗りをすれば五分とかからないだろう。警察に見つかるとややこしくなるので二人乗りはせず自転車をカラカラと引きながら二人は歩いていた

「昨日ね、雫がまた騒いでたんだよ」

「どういうふうに?」

「『今日こそは師匠の教えに従って必ず倒す』とかわけわからないこたをいいながら部屋の中を騒いでたよ。しばらくすると静かになったけどね
師匠ってなんだろう?」

「顧問の先生のことじゃ無いか?雫ちゃんのことだし師匠とか呼びそうやん」

「うーん～、そうかな?そこまで雫ってアホだったかな…」

「それはアホとかいう問題なのか…」

「あ、あと、今朝も騒がしかったよ」

「お前の妹は年中騒がしいんじゃないか？」

「そうかも…今朝は今朝でテレビを聞いて『栗山って人が見つかっただってー！！』って騒いでた。確かに行方不明になってから戻ってくるケースは珍しいけど驚きすぎだと思ったよ…。だって飲んでた牛乳吐き出してたもん」

「ははは…」

「もう少し大人しくなって欲しいよ…」

「無理だな」

二人はたわいのない会話をしながら歩き続けていると『雲英』と表札がついた一軒家が見えた

「着いた。入ってよ」

「おじゃましまーす」

結城は通いなれているせいかあまり緊張せずに軽い挨拶をして海の家に入っていった

「先に部屋に行っといて」

「へーい」

家の中には勿論誰もいない。結城は既に海の部屋を知っていたため二階に上がると一直線に海の部屋に向かう。

「相変わらずだな…」

海の部屋はそれほど広く無く八畳ぐらいと思える。その八畳の部屋にベットやテレビ、タンスなどを置くと空いてるスペースは限られてくるのだが、そのスペースもゲームや漫画が散らばっているせいでまともに空いてるスペースは無い

「アハハ～、適当にのけて自分の座れる場所作ってよ」

いつのまにか海は部屋の前に来ておりつったている結城に対して言う

「お前掃除しろよ…」

結城は足下にあったゲームや漫画を適当にのけ自分の座れるぐらいのスペースを作るとそこに座る

「コレが買ったやつだよ」

海はゲームだらけの山から一つのゲームを取り出した。そのゲームは最近発売されたものでありＣＭや雑誌の紹介で結構取り上げられているものであった

「よし！早速やろうじゃないか！！」

「…急に元気になったね」

「そりゃテンションも上がるさ
それはそうと雫ちゃん何時ごろ帰ってくんの？」

「６時半ぐらいだと思う」

結城はポケットから携帯を取り出して時間を見た。１５時５４分と
ディスプレイには表示されている

「じゃあ二時間ぐらい遊べるな」

「そこまで気にする…」

「当たり前じゃないか！さぁ、やろうか」

海がゲームをゲーム機にいれテレビをつけるととてもリアルな画質
が出てくる

「うわ～、どきどきだわ」

「僕もちょっとどきどきする」

アタッ！フォアッッタァアアアア！！

ブッ！グァァァァァ！！

ＹＯＵ　ＬＯＳＥ

とテレビの画面一杯に文字が表示される

「あー負けちゃった…」

「これで３４戦２６勝で俺の勝ちだな」

「なんで…持ち主の僕より強いんだ」

あまりにも悔しかったのだろうか海はベットにうつ伏せになりながら一人呟いていた。

「俺の手には神が宿っていると言っただろう」

結城はまるでこの腕のおかげだとでもいうように腕を高くあげガッツポーズをしていた

海はチラッと横目でそれを見ると

「ゲームの神様が宿ってるなんて…

フッ」

と鼻で笑っておいた

「馬鹿にしたよな？今」

「んーん、凄いねと言う意味で言ったんだよ」

「嘘つけ！！」
結城がベットの飛び乗り海とじゃれていると微かにリビングから声が聞こえた

二人して急に静かになり耳の神経を研ぎ澄まして聞いていたところ女性の声と言うことに二人は気づいた

「まさか！？」

結城が冷や汗をかき始めるのを見てすかさず海は追い討ちをかけた

「えー、ただいまの時刻１８時４２分なり」

「どうすれば…
窓から飛び降りるか隙をついて玄関から逃げ出すか…」

「窓からは無理だね～
それに玄関に置いてある靴でもう雫は誰か来てると気づいてると思うから挨拶ぐらいはするんじゃないかな？」

結城はどうすればと呟きながら頭を捻って考えごとをしているため海の言葉が耳に入らない

海はなぜそんなにも考える必要があるのかと思っていたがそれよりも必死で考えている結城の姿を見てついついにやけてしまう

「結城、もう諦めて顔を合わせたら」

「それはちょっと…」

「そんなに会いづらい？」

「ま、まぁ…」

海はその言葉を聞いてニヤーと顔を緩めるとベットから抜け出し部屋を開けて思いっきり叫ぶ

「雫ーー！！今、結城が来てるモガモガ」

「お前ふざけるなよ！！」

結城はその行動に反応するのに少し遅れ海の口を閉ざす時には既に遅く。一階からは

「兄貴それマジー！！今から行くわ」

と声がするとドタドタと階段をかけのぼる音が聞こえてくる

「…どうしてくれるんだよ」

「一体今から何が始まるのか楽しみ♪」

数秒後、

バンッ！

と海の部屋が開くとそこには

結城はあきらめたのか部屋の中で海と一緒にじっとしていた

「おっす！！久しぶりです結城さん」

海とは正反対で兄弟とは思えないボーイッシュな女の子。『雲英雫』が立っていた

恐らく四話だろう

「お久しぶりです！結城さん」

「ああ、うん。久しぶり」

結城は改めて海の妹、雫を見る。

雫の服装は勿論制服。雫の行ってる高校は芦田高校では無くスポーツの名門高に通っており制服の胸の部分には大きくその高校を示すワッペンがついている。体格は女性にしては大きく海とは違ってガッチリとして女性にしては背も高い。顔はこれも海とは違って男性に近く、私服で歩いているとよく男に間違えられるらしい。
空手を子供の頃からやっていたせいか口調が少し、他の人とは違うし、性格も男らしい。
そのせいで人によっては好き嫌いがあるかもしれないが、別に結城はそんなことはどうでもよかった。結城が雫を苦手な理由それは

「結城さ～ん。結城さん師匠より強いんでしょ？オレに稽古つけてくださいよ～」

「いや、それはちょっと…」

結城が雫が苦手な理由、それは雫が左手につけている緑色のリストバントのせいだ

数ヶ月前

「黄色の鬼とは少しめんどくさいな…」

結城はジャージで木刀を持ちながら日本であり日本で無い場所のジャングルにいた

この時は朝早くであったため朝飯には間に合うようにと急ぎながら結城は鬼を探していた

鬼を見つけるために歩き回っていると

「う、うわーーー!!!
くるな、くるな化け物!!!こっちにくるな!!」

とあまり遠くない場所から声が聞こえてきた

(慌てぶりから新人だな…
早めに助けて帰ろう)

結城は声がしたであろう方向へ全力で走った。少し広い空間に出たと思ったらそこには愛くるしさが微塵も感じられない巨大なリスのような生物がおり、そのリスからは六本の触手のようなものが生えていてその触手は今にも女性に襲いかかろうとしていた

「今日はこれで終わりかな?」

結城は木刀を構えるとある一定の距離を保ったままでリスの触手に向かって木刀を降り下ろした

ボタボタボタ

結城が木刀を降り下ろすと六本の触手は全て何かに切断されたように地面に切り落とされる

自分の腕と同じ触手を切り落とされ悲鳴を上げるとリスは目の前にいる女性を飲み込もうと大きく口を開けた

「う、ウワァァァアアア！！！！
たす、誰か助けてー！！！！」

女性はあまりの恐怖に目を閉じる

いつまで立っても来ない痛みに疑問を感じ目を開けると目の前には口を開けたまま止まっているリスがいた。

「大丈夫か？」

止まっているリスの胴体が徐々にずれ始め真っ二つに割れるとリスの向こう側には結城が立っていた

「あ、ありがとうございます…
あれ？結…城さん？」

「も、もしかして…雫ちゃん？」

結城は制服の雫を見慣れていたため私服の雫には気付かなかったよ

うだ

「結城さん…これはなんですか？ドッキリですか？オレを怖がらそうとしてたんですか？」

「違う。今から説明するからよく聞くんだ―…」

結城は何人もの人にこの世界のことを説明しているためスムーズにわかりやすく伝えることができて雫も結城のおよそのことは説明で納得がいった

「じゃあこれからどうやってオレは生きていけばいいんですか？」

「俺の知り合いに結構この世界に慣れている人がいるからそいつから学んで。ちゃんと紹介はしとくから」

「結城さんが教えてくれないんですか？」

「いや、俺はちょっと…」

「オレ結城さんがいいんですけど…」

「無理です！あ、そろそろ帰れる！じゃあ！！」

そう言って結城は現代に戻っていった。

それからというもの雫は生きていくために結城に紹介してもらった人物に生きていく術を学び始めた。

雫の師匠は生きていく術を雫に教えながらよく結城のことを話していた。

「あの坊主はな、ある戦いの生き残った中の一人らしくてな…。俺はその戦いにその頃は参加してなかったから詳しくは知らないんだがその戦いに参加していた師匠によると『あれは英雄の中の一人だ。私なんか足下にも及ばん』と言ってたよ。俺は師匠が最強と信じていたためそのことが信じられなくてな、自分一人である程度戦えるようになってから師匠に許しを貰って、ここへ引っ越したんだよ。坊主を探すためにな…

ある時、あの世界に行ったんだよ。その時はリストバンドが紫になっていてこれは少しヤバイなと思っていたやさき…

大量の鬼が現れたんだよ

それはおよそ１００近くはいたと思うね。俺は何とか３０ほどは倒せたんだがまだまだ修行が足りなかったようでそこから一匹も倒せなくなった

その時だよ、たまたま近くを通りかかった坊主は残りの７０の鬼を１０分もかからず殺しやがった。その光景を見てから師匠の言ったことは嘘じゃなかったと思い知らされたよ。

そこからだ、俺と坊主の繋がりは」

「じゃあ師匠が結城さんと戦ったら負けますか！？」

「やりあったことは無いが恐らく勝負にならんだろう。俺の師匠でさえ数１０分もつのが限界だと言ってたしな」

「そうなんですか！わかりました！」

その言葉を聞いて以来雫は結城に興味を持ち始め結城に会うたびに稽古をつけて下さいと言うようになった

―現代に戻る―

「お願いします！！何でもするんで稽古をつけて下さい！！」

雫は兄の海が結城の隣にいるのにもかかわらずに必死に結城に頭を下げて頼んでいる

「ねぇー、結城。稽古って？もしかしてゲームの？」

「ちげぇよ！！

…ただ雫ちゃんは誰かに俺は『空手が半端なく強い』って吹き込まれたらしく会うたびに稽古をつけて下さいって言ってくるんだよ！」

結城は関係無い人にあの世界のことを言っても仕方ないので即興で適当に作った嘘を言う

「ふーん。結城が雫より空手が強いねぇ

…ふっ」

「ほ～う、またお前は俺を馬鹿にしたな」

「別に～、隠された秘密があって凄いな～と思っただけだよ」

「…やっぱりお前、鼻から下無くなれ」

「嫌だけど」
海はずっとニヤニヤしていた
空気が海と結城に流されていく中、少しの沈黙にまた雫は入ってくる

「それで結城さん。いつオレに稽古をつけてくれますか？」
「つけねぇよ！先生に習えよ！」
「たまには他の人と稽古をやりたいじゃないですか」
「……じゃあ雫ちゃんの先生から許可を貰ってきてOKが出たなら勝負することを考えるよ」
「わかりました！オレ師匠からOK貰えるか聞いてきます！」
雫は海の部屋を出ていくと階段を下りてどこかに出掛けていった
「……さて、今のうちに逃げるとしますか」
「待ってあげないの？」
「いや～
もういい時間だし母さんが晩飯作ってると思うから帰るわ」
「僕は帰ってきた雫になんて説明すればいいんだよ…」

「なんか適当に言っといてくれじゃ！」

結城はカバンを持つとそそくさと海の部屋を出ていき家を後にする。外は薄暗く人も少ないため一瞬、結城は雫のことを心配するが、

（不審者…は、いても雫ちゃんは撃退するやろうし大丈夫やろ）

そこらへんの人が雫に勝てるわけが無いと思い返すと気兼ねせず自転車に乗りながら結城は家に帰っていった

「ただいまー」

「おかえり」

家から聴こえてくる声は女性だけ、家の中には結城の母、智里だけであった。結城がリビングに入ると既に晩御飯がテーブルに並べられている。

「さっさと着替えて来なさい。晩御飯よ」

「へーい」

結城は部屋に入ると制服から私服に着替える。

「連続で呼ばれんやろ」

カバンの中から緑色のリストバントを取り出すといつものように時計の横に置くと晩御飯を食べにリビングに降りていった

「そういや結城、あんたに手紙きてたわよ」

「手紙？古風な…
誰から？」

「差出人は『山真　栗』って書いてあったわ」

そう言うと智里は結城に封筒を渡した。

（誰だよ…そんなやつ知らねぇよ）

と思いながら封筒を開けると一通の紙が入っていた。

（えーと、

『ややこしい、挨拶は省かせてもらう。覚えてるか？私だ、栗山真だ。
改めて礼を言わせてもらおう、あのときは君のお陰で本当に助かった。
本来なら直接きみの家にいって礼言わせてもらいたいが、ある意味私は有名人だし妻からできる限り遠出は止めてくれと言われているためあまり変に動けないんだ。
今は君の言った通り生きていく術を教えてくれる人に出合い少しづつだが体を鍛えている

私に生きていく術を教えてくれる人はどうやら君と同じ生き残りだそうで君のことを話すとまだ生きてたかと喜んでいたよ。
今度君と会うときは自分の身は自分で守れるぐらい強くなっておくつもりだ。

もし、何か困ったことがあったならできる限り力になるつもりなので遠慮なく頼ってほしい

私にできる恩返しはそれくらいだ

私の電話番号は―…』

栗山さんかよ！！

まぁ、死なんように頑張って下さい）

「どんな用件だったの？」

「つい最近、落ちてた携帯を交番に届けたんだけど、その携帯の持ち主のお礼の手紙」

「ふーん、律儀な人もいるものね」

「ほんとにそうだわ」

手紙に書いてあった電話番号を携帯に登録し手紙をポケットにいれると結城は智里と一緒に晩御飯を食べるのであった。

恐らく五話だろう（前書き）

言うまでもないかも知れないが一応言っておく

作者は滋賀住み（；´д｀）ゞ！

恐らく五話だろう

あっというまに日は過ぎて土曜日の朝。結城はぐっすりと眠っていた。最近はあの世界に呼ばれることもなく最後に行ったのは栗山真の時ぐらいだ。基本的にあの世界に呼ばれるのは多くて週三～四、少なくて二週間に一回から一ヶ月に一回、それ以上も以下もあまりない。なのになぜ疲れているわけでも無いのにこんなにも寝ているのか？答えは簡単、休みだからだ。用事がない場合結城は昼過ぎまで寝ている。低血圧もあるのだが、本人いわく『休みは寝るためにある』ということだ。今日もまたゆっくり昼過ぎまで寝ようとしていたときに、

～♪

結城の携帯に一件メールが入る。

「朝から誰やねん…」

結城は寝ぼけながら携帯をいじり届いたメールを開く

『
差出人『斉藤　務』
件名　『着信アリ』
本分
『転送スレバ死ナナイ』』

迷わず結城は務にメールを転送して再び布団にうずくまる。

～♪

また結城の携帯にメールが届いた

チッ、と舌打ちしながらメールを開くと務からであった

『速すぎるわ！もう少し躊躇いを持て！！転送されたやつは死ぬんだぞ！』

ポチポチポチ

『で、何？朝早くから』

～♪

『お前、今日一緒に映画観に行く約束忘れてないやろな？約束は１０時００分に駅前集合

今の時間は０９時２８分やぞ？』

そのメールを見た瞬間結城の頭はフル回転して目が覚めた

ポチポチポチ

『任せろ。俺を誰だと思ってる？忘れてるはずなかろう勿論１０時００分には駅前についてるさ』

結城は片手に携帯を持ちながら返信しながら急いで私服へと着替えていた

～♪

『一秒でも遅れたら雫ちゃんにお前の連絡先バラす』

ポチポチポチ

『待て、それだけは勘弁してくれ』

～♪

『遅れんなよ♪』

「あの野郎がぁぁぁあ！！！」

結城が私服に着替え終わりいろいろ準備をして家から出れる状態になったところで時間は０９時４９分分

結城の家から駅までは自転車でおよそ１３分

「行ける！本気で走れば行けるはずだ！
財布と携帯は持ってる！行くぞぉぉお！！」

結城は財布と携帯さえ持っていたらあとは何とかなると思いあまり忘れ物の確認をせずに智里に「遊んでくる！」とだけ言って急いで家を出ていった

結城の部屋にはいつものように時計の横に緑色のリストバントが置いてあった

―０９時５９分―

「３６、３５、３４、あ、きよった」

務のすぐ先には肩で息をしながら走ってくる結城がいた

「駐輪場から駅まで微妙に遠かった…」

「惜しいな～、あと数十秒だったんだけどな」

「間に合うに決まってるだろう。俺だからな」

「はいはい。じゃあさっさと切符買うか。電車も来るし」

「ああ」

結城は務から少し離れて歩く。

「おい…」

「話しかけるな…

はたからみたら絡んでるようにしか見えん」

「お前、それ何回目だよ」

とふざけながら務と結城は切符を買うと電車に乗るのであった

―１０時２４分―

電車から降りると務が走り始めたので結城はそれを追いかけていく

大きい建物に入ると務は一直線に映画館へと向かった

「セーフ！！１０時３０分の上映までには間に合った」

「無駄に走らせるなよ…」

務はとても楽しみにしていたのかレジに行くと笑いながら『大人、インセクト二枚』と言った。結城もその隣にいたのだがあまりにテンションが高い務についていけずに少し引いている。

「す、３Ｄですのでお二人様で１５００円になります」

店員も結城と同じように強面の笑顔の務に少し引いているが、そこはちゃんとした店員でたとえひきつっても笑顔は崩さなかった

二人はお金を払うとスクリーンの場所まで移動しようとしたのだが務が突然

「やっぱり、映画にはポップコーンだな

すぐ買ってくっから待っといてくれ」

といってポップコーン売り場に走っていった

（いらんだろ別に…

ってか１５００円高いな）

と思っていると後ろから声をかけられた

「すみません、あの人のお友達でしょうか？」

結城が振り返るとそこにはだいたい同い年でメガネをかけて一見地味そうな女の子が務を指差していた

「あ、はい。そうですけど…」

「さっきあの人が映画の券を落としていったんで、これです」

メガネの女の子は手にインセクトと書かれた一枚の券を持っていた

「あー、多分あいつのです。ありがとうございます」

お礼を言ってメガネの女の子から券を貰おうとした時ふと片方の腕についてある緑色のリストバントが目に入った

「リストバント…」

「えっ？これがどうかしましたか？」

「いえ…別に。すみません。ありがとうございました」

「いえ…私も映画を見るので」

メガネの女の子は映画の券を結城に渡すと結城たちが見るのとは違う映画を見に行った

（そういや、俺リストバント置いてきたわ
別に持っとく必要が無いから忘れてた…
…あの女の子ももしかしたら鬼狩りしてんのかな？それとも偶然緑色のリストバントしてたんかな～
まぁ、どうでもいいや）

女の子が去ってから数秒後に大量のポップコーンが入ったバケツサイズのカップを両手で持ちながら務は走ってやってきた

「さっ、見に行こうか」

「お前、映画の券無いのにどうやって観に行くんだよ…」

「えっ…、あれっ？そういや握っていたはずの映画の券がねぇ！！」

「さっきメガネの女の子がお前の落とした券を届けに来てくれたぞ」

そういって結城は映画の券を務に渡した。それを務は大事そうに受け取りポケットにしまう

「いや～ありがたい。その女の子に感謝だな！」

「そうやな」

「…でもさ」

「ん？」

「俺が落としたってわかってたならなんで俺に届けてくれなかったんだろう…」

「答えは鏡の中にあるよ」

「……観に行くか」

先まで高かったテンションは一気に下がり務はトボトボと上映される場所まで歩いていった。

―12時30分―

現在務は結城の隣で涙を流していた

「ちょっ、お前泣き止めって」

「だって、だってよぉぉお。まさかアランドロフが人間に殺られるとは思ってもなかったしよ…」

務は映画の内容に心を射たれ涙を流しているのだが、他人から見れば強面の坊主が涙を流している＝尋常じゃないことがあった。にしか見えない。そしてその隣に介抱している男が立っている＝そいつが何かしたんじゃないか？という視線を浴びる結城はかなり困った状況にいた

「もう頼むから泣くな…俺が泣きたくなる」

「だってよぉぉお」

「昼奢るから」

「飯食いに行くか」

務はおごるという言葉を待ってましたと言うように態度が１８０度変わった

「この野郎ぉ…」

「俺、ラーメン食いたい気分やわ」

結城は自分で言ったことは仕方ないと思いながら映画館を出てラーメン屋を探すのであった

務の案内によりついたラーメン屋は映画館のすぐ近くにありあまり大きなラーメン屋では無く隠れた名店と言うようなオーラを放ってたっていた

「ここの味噌がうまいんだよ！」

「なんでお前は知ってるねん…」

「勿論、常連だからだ！！
おやっさーん！」

務はそそくさとラーメン屋に入り、テレビで見るように店主を呼んでいる

結城もラーメン屋に入ったところ中は人が何人か座れるほどの椅子しか無く客はサラリーマンみたいな人がチラホラといるだけであった

「おい！こっちこっち。お前の分も頼んどいたし」

「どんだけ食わせたいんだよ…」

務が泣くのを止めてほっと結城であったがテンションがあまりにも高い務の相手をするのも面倒と思う結城であった

「お待ちどうさま、と
味噌二つね
坊主は味噌が好きなんだな～
隣にいるのはダチか？」

「ここの味噌上手いですもん。隣にいるのはそうっすよ。結城って言うんで、恐らく常連になるうちの一人だと思います」

「勝手に決めんな」

「まぁ、まぁ、とりあえず食ってみろって」

結城は務に進められるまま味噌ラーメンに箸をのばす

「……美味いとは思うけど比較する対象がインスタントしか無いしな」

「今度からお前、休みの日はラーメンを食べ歩け。そして他の店と比較しろ。絶対ここの味噌が勝ってるから」

「嫌じゃ」

―13時48分―

「あー、美味かった」

「次どこいく？」

昼御飯を食べ一息して次の行き先を二人は決めていた

「適当に店見に行くか？それともゲーセン、ボーリング、カラオケ…」

～♪

どこにいくか悩んでいたとき務の携帯が鳴った。
務は携帯を取りだしメールを見て少し考えるように唸りはじめた

「どした？」

「母さんからのメールで、『帰ってきなさい』としかかかれてないんだよ…
なんか怒られるようなことした覚え無いんだけどな…」

「まぁ、仕方ないんじゃね？とにかく家に帰ったら？」

「でもこれから…」

「あぁ、気にすんな。今度何か奢ってくれたらいいよ」

「…お前、最悪だな」

「えっ？なんでもいいって？」

「黙れ

…悪いな、じゃあ帰るわ。奢ってくれてありがと！！」

務は自分の荷物を纏めると走ってラーメン屋を出ていった

「俺も適当にぶらついて帰るか」

結城もお金を払いラーメン屋を後にする

―１４時００分―

なんか面白い漫画でも無いかと思い本屋に一人結城は来ていた。うるさい務もいないためゆっくりと本を探していると先程見たメガネの女の子が本をじっくり見ているのが結城に見えた

別に声をかける必要もないのでそのメガネの女の子から視線を外し再び本を探そうとしたときふとメガネの女の子の腕を見てしまった

（まさか！？）

メガネの女の子の腕は特に変わったところは無い。先程左腕につけていたリストバントが緑色なら黄色く変わっていくことを除けば…

（嘘だろ？俺なんも持ってきてないんだが…）

結城は本屋を後にして人気の無い場所へ移動していた。急に今の場所から消えてあの世界に行くためである。人に見付かると神隠し、もしくは瞬間移動にしか見えないためいつあの世界に行くのかとひやひやしながらトイレにかけこんだ。

さいわいトイレには誰もいなかった

結城がトイレにかけこみ数秒すると結城の見ている視界はトイレから瞬きする間にいつものジャングルへと変わっていた

「はぁ～、黄色レベルかよ…」

この世界にくると絶対にリストバントは手についてある

例え現代で着けてなくてもだ。この世界でリストバントがついていない＝死だ

わかってたはいたが結城は改めて自分の腕についてある黄色のリストバントを見て溜め息をつくのであった。

恐らく六話だろう

いつもと違ってジャージでは無いためあまり服を汚したくはな無いのか結城はゆっくりとジャングルの中を歩いていた。

（誰かさっさとやってくんねーかな？早めに帰りたいんだが…）

歩きだしてから数分は経過しているが結城の視界には鬼は入ってこない

普通ならリストバントの力で鬼が人間達をすぐに見つけるのだが結城の前には出てこない

なぜ姿を現さないのか？

考えられるのはだいたい二つ

一つは、鬼が別の近くにいる人間の所へ行った

二つ目は、誰かがすでに鬼と戦闘している

（…すでに他の人間が鬼と戦闘しているほうが楽なんだけどな～）

言うまでも無いかも知れないがリストバントはあくまで鬼を引き寄せるだけであって引っ張って来るものでは無い。鬼だって何匹もいるわけではないので（時と場合とランクによる）目の前に人間がいた場合その人間を喰おうとする。ランクの低い単体もしくは小数の

鬼はわざわざ遠いところにいる餌を取りにいくより目の前の餌を狙うということだ。

（それならそれで早めに狩って欲しいもんだ…
さっさと家に帰りたい…）

結城は草木をわけ歩き続ける。他人任せにしたいものだがこれは勝負では無い。自分の生死をわける殺し合いである。必ず一対一で戦わなければならないことも無いので鬼と戦っている人物に会えば加勢するつもりで歩いていた

（…それに、鬼を狩ったら早く帰れるし）

そんなことを思いながら結城が歩き続けているとそんなに遠く無い場所からメキメキと木が倒れるような音が聞こえてきた。

（そっちか！？）

音の聞こえた方向に結城が走っていくと、そこには、パッと見た感じハエのような体で体中から毒々しい体液を流す全長１５０？ほどの鬼がいた。そしてその鬼が視界にとらえている人間は、先程結城に映画の券を渡してくれたメガネの女の子だった。メガネの女の子は上手く木々に隠れながらハエから逃げ、時々ハエの動きを観察していた。

（現代でリストバントをつけていたと言うことはこの世界に最低でも一回以上はこの世界に来たことがあるということ…
それにちゃんと木々に隠れながら敵の観察をしていることから生き

る術を身に付けてるだろうな…
少し様子を見よう）

結城は鬼の視界に入らないギリギリの所で木に隠れながらハエとメガネの女の子の様子を見ることにした。結城が割り込み鬼を瞬殺することは勿論可能であるが結城はそれをしない。何故か？それはあのメガネの女の子に経験を積んでほしいからだ。この世界で生きていくには勿論生きる術を学ばなければならない。だが生きる術を人に教えてもらうことは簡単だ。ただ学び訓練をすればいいだけの話だ。でもそこには生きるか死ぬかという文字は存在しない、あるのはどれだけ行っても勝つか負けるかである。それだけでは人は成長しない。ある一定のラインまでは成長するがそれ以上は勝負などではそのラインは越えられない。生きるか死ぬかという実戦の中で生きたいという意思を持つものだけがラインを飛び越え成長しこの世界で生きていくことができるのだ。だからこそ結城は手を出さずに見守ることにする

「やぁぁああ！！」

木の側から女の子は出てくるとポケットから銃を取り出しその銃口をハエに向けた。女の子が引き金を引くと銃口から目には見えない何かが飛び出しハエに直撃する。

「ブフォォオオオ！！」

メガネの女の子は両手で銃を持ちひたすらハエに向け撃ち続けるが、当のハエは効いていないのか防御も避けようともせずゆっくり獲物の女の子に近づいていく

「くっ！！」

どうすればいいのかわからないのか女の子は徐々に近付いてくるハエに対して撃ち続けている

ハエは自分の手の届く範囲まで近づくと、その毒々しい体液を体からメガネの女の子に向かって噴射した

「！？」

修業や訓練をしていたのだろう。何か身の危険を感じた女の子は体液から逃れるため咄嗟に横に跳んだ

ジューーー

ハエの体液が地面に落ちる。さっきまで女の子がいた場所はおよそ１０？は溶けていた

それを見た女の子は目を見開き、すぐにハエから逃げようと木から木へ上手く身を隠す

「ブフォォオオホホホ！！！」

ハエは獲物が逃げないようにと自分を中心に半径２０メートルほどの距離に体液を周囲に噴射した。その体液が触れた木や土、草など全てボロボロに溶けていく

女の子は辛うじてその体液に当たっていなかったのか半分ほど溶けた木の後ろで外傷も無く立っていた

「えっ？えっ？」

何が起こったのかが理解出来無いのだろう。いきなり周りの植物や土が溶けたのだから……

しかし女の子はハエから垂れている体液を見て何が起こったのかをすぐに気付きこれからどうすればいいのかを瞬時に判断しようとした時、まるでそんな隙を与えないとでも言うように再びハエから体液が放出された。今度の体液は先程とは違い獲物を確実に仕止めたいのか見るからに量が増えていた。

その毒々しい体液が降り注ぐのはおよそ半径４０メートルはくだらないだろう。

（ここまで体液を飛ばしてくるとは……

俺には意味は無いがあの女の子はヤバいかも知れん

……仕方ない）

ハエをぎりぎり見えるか見えないかと言う場所の木に隠れている結城はそのハエの攻撃を見て少し動きだした

まず自分の周囲に手をかざす。

その後、女の子がいる場所に目を向け両手の親指と人差し指を繋げわっかを作ると女の子に向ける。それからとくに何かするわけでも無く指を離しそのまま結城は突っ立っている

そしてその後その突っ立っている結城に向かってぼとぼととハエの体液が結城を溶かそうと降り注ぐが体液は結城に触れられなかった。大量の体液は結城のすぐ近くまで来るとまるで空気の壁があるように結城を避け体液は地面に落ちていく

そして一方女の子のほうでも同じ現象が起きていた。女の子の近くに体液が来ると体液は女の子を避けて地面にに落ちていく。女の子はどうなってるの？とでも言うように戸惑っていた

だがそれは自分にとっては勝機、有利だと気付くとポケットから二個目の銃を取りだし二丁の拳銃で何かをハエの腹部に向かって連射する。

「ブフォォブブブ」

先程よりは効いているのかハエは多少仰け反る。そしてメガネの女の子は休む暇を与えず更に撃ち続けた結果、

「ブフォォォォ」

ハエの腹部に小さくヒビが入る。それを視認した女の子は更に腹部に向かって撃ち続けた

「オオオォォォオオォ！！」

だがハエもそのまま撃たれ続けているだけでは無い。ハエは再び周囲に体液を撒き散らす
が、女の子には当たらず女の子に当たりそうになる体液は全部女の子を避けて地面に落ちていく

「これで…
終わり！！」

女の子は一呼吸置き二丁の拳銃からレーザーのような物ハエの腹部に放った
そのレーザーはハエの腹部を貫通してから姿が消えた

「ギギギギ…」

ハエは地面に倒れしばらくは手足が動いていたが徐々に動かなくなると完全に絶命したのかハエの体が砂になって崩れていった

「ハァ…ハァ…
私一人で…」

女の子はほっとしたのか地面にペタリと座り込んだ

（やっと帰れる…
って、ハァ〜）

結城は帰れると思った矢先、ふと自分のリストバンドを見て溜め息をついた
結城の視線の先には、先程まで黄色だったリストバンドが黄緑色に変化していた

それに気づいてから数秒後、近くからブゥゥ〜ンと羽音が聞こえてきた

（エェ〜
マジか…）

音の先、それはハエの砂の中からだった

「えっ？」

もぞもぞと動く砂をじっと見つめる。両手に持っている拳銃を再び強く握り締めその砂に向かって撃とうとした時

ブゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥンンン

先程のとは比べると小さく普通のハエとは変わり無いサイズであるが数百はくだらないほどのハエが砂の中から出てきた

「い、い…やぁぁあ！！」

女の子はハエに向かって二丁の拳銃を乱射する。
ハエが何百もいるおかげで二発に一発はどこに撃ってもハエに当たるが数が多すぎるせいでハエはいっこうに減る気配が無い。

ブゥゥゥゥンン

自分達の餌であり敵でもある女の子に目をつけるといっせいに何百ものハエが女の子に向かって物凄いスピードで飛んでいく

「いや、いやぁぁあああ！！！」

女の子は拳銃を手から離し自分の体に手を当てるとこれから起こるであろう出来事を想像しながらうずくまった

「これが限界か…」

声が聞こえると同時に突如ハエが半分以上消し飛んだ
女の子は人の声が聴こえた方を見る
「よくやったほうだな」
「し、師匠！！」
女の子の視線の先には煙草を吸いながら手には拳銃を持ち短髪の２０代前半であろう女性が木の後ろからゆっくりと歩いてきた

「待ってな。すぐ終わらせるから」
「はい！」
短髪の女性は拳銃を構えると引き金を引いた
すると、女の子が放ったレーザーのような物とは比べ物にならない大きさのレーザーのような物が銃口から放たれた。
残りの半分のハエは逃げる暇も無く消滅した

「ありがとうございます。師匠！」
「んー？気にすんな
大変だったなお前も」

「はい…。
ハエがトラウマになりそうです…」

「アッハッハ！！
まぁ、あんなでかいハエと大群のハエを見たらね」

「そうそう、でかいハエと大群のハエを…
って、師匠
もしかして最初からいました？」

「おう。勿論
お前の後ろをずっとつけてたからな」

「師匠…
ならもっと早く助けて下さいよ
危うく死にそうだったんですから……」

「いや～、実戦が一番経験積めるしな
それに死ぬはずが無いし」

「えっ？何でですか？」

「気付か無いのも無理無いかもな。私でもギリギリ見えるぐらいだし」

「何がですか？」

「簡単に言えば結界かな？」

「結界？」

「そっ。恐らく黄色程度の鬼が何匹集まっても壊せないほどの強度の結界」

「なんで私にそんなものが…」

「誰かがつけてくれたんだろ？心当たりは無いのか？」

「…少しも無いです」

「そりゃ残念。これぐらいの結界を作れる奴を一目見たかったんだけどなー

ま、でもいつか会うでしょ」

「そうでしょうね」

女の子達が話し合ってる頃結城は…

（凄いな～

あの女の人、一瞬だったな

ん？ってか俺何でこんなにこそこそしてるんだっけ？

まぁ、どうでもいいや
帰ろう…）

数秒後、結城の視界が一瞬暗くなる

「あー、しんど
俺、何もしてないけどな」

結城の視界はジャングルからトイレの個室に変わっていた

時刻は１４時４０分

「中途半端な時間…
めんどくさー
漫画適当に買って帰るか」

トイレの個室から出て再び本屋に戻ると週刊紙を買い結城は家に帰っていった

―翌日―

「昨日何があったんだ？」

結城は務の顔を見るなり聞いてみた。

「いやー、スマン

実は隠してたテストが見つかってさ
怒　ら　れ　て　た」

「どこの漫画の話だよ…」

「ほんまにごめんなー
御詫びにいいこと教えたる」

「いいこと？」

「そう
極秘情報」

「聞こうじゃないか」

「ここだけの話なんだが…」

「うん」

「俺の物理のテスト２７点」

「……で極秘情報は？」

「スルーすんな」

「だってクラスの全員知ってるから
で、極秘情報は？」

「さらっととてつもないこと言ったな今！？」

「いや、言ってない」

「はぁ…もういいわ

極秘情報だけど、明日新しい若い女先生が来るってさ

保健室の」

「保健室の先生だと！？」

「いい響だよな～」

「ご報告ありがとう親友よ」

「へへっ、よせやい」

「あ、無理。やっぱキモいわ」

「俺もそう思う…

とにかく明日は保健室にいかないとな」

「勿論。お礼と言ってはなんだがそういや俺も極秘情報がある」

「何？」

「この前お前は授業中寝てたから知らないだろうが、今日物理の小テスト」

「なん…だと！？」

「しかも一時間目物理」

「……親友よ」

「なんだ親友？」

「くたばれ」

「だが断る」

一時間目の授業が始まるまでの少しの間、ひたすら物理の参考書とにらめっこする務がいた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8598x/

あゞ無情（適当）

2011年11月27日02時56分発行